

## P-12

# 百会穴への円皮鍼治療による抗ストレス効果 ～急性ストレスに対する検討～

砂川正隆<sup>1</sup>, 山口孝二郎<sup>1,2</sup>, 小山悠子<sup>3</sup>

昭和大学医学部生理学講座生体制御学部門<sup>1</sup>, 医療法人ハヤの会 歯科慢性疾患診療室<sup>2</sup>, 医療法人社団明悠会 サンデンタルクリニック<sup>3</sup>

### 【目的】

オレキシンは主として視床下部から分泌される神経ペプチドの一種で、ストレス反応の制御に関与している。我々は、慢性の精神的ストレスに対して円皮鍼治療法有効であり、亢進したオレキシニン A の分泌が、ヒト百会穴相当部位 (GV20) への円皮鍼治療によって抑制されることを既に報告している。一方、疼痛モデルラットに対する鍼通電 (三陰交と足三里穴) によって、低下したオレキシニン A の分泌が増加するとの報告もある。本研究では、ラット急性ストレスモデルを用いて、ストレスのタイプによってオレキシニンの分泌に与える影響が異なるのかを検討した。

### 【方法】

Wistar 系雄性ラットを対照群 (Control 群), 急性ストレス群 (Stress 群), 円皮鍼 + 急性ストレス群 (PTN+Stress 群) の 3 群に分けた。PTN+Stress 群には GV20 に円皮鍼 (長さ 1.2mm) を貼付した。急性ストレスとして 90 分間の拘束ストレス負荷を行い、拘束中の排便量の測定ならび、拘束後の血漿オレキシニン A 濃度を測定した。

### 【結果】

拘束ストレス負荷により排便が誘発され、本モデル動物は下痢型過敏症腸症候群モデルとしても用いられている。Stress 群と比較し、PTN+Stress 群では有意に排便が抑制された。血漿オレキシニン A 濃度は、Control 群と比較し Stress 群では有意に低下したが、PTN+Stress 群ではその低下が有意に抑制された。

### 【考察】

ストレスの種類によって生体内での病的反応は異なる。慢性ストレスモデルでは、増加したオレキシニン A の分泌が円皮鍼治療によって抑制されたが、急性ストレスモデルではオレキシニン A の減少を抑制した。緊急時の急性ストレス反応は、生体をストレス状況に適応させるために必要な反応であり、円皮鍼によってストレスに対する抵抗性が高められたと考えられる。円皮鍼治療は急性ストレスに対しても有効であり、オレキシニン A の分泌に対して中庸作用を有することが示唆された。